

【優秀賞】

入居者参加型地震訓練

～共に助け合う仕組み作り～

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉生活サービス課

○小田英生 牛田慎太郎

【目的】

防災委員会では、施設内における災害の予防と人命の安全、被害の軽減を図ることを目的とし年間を通して様々な防災訓練を計画し実行してきた。

とりわけ東海大地震を想定した9月の地震訓練は特に力を入れてきた。地震発生後から、1秒でも早く傷病者を発見し診療所に搬送できるよう毎年防災体制の見直しを図り、以前は1時間程度要していた安否確認は平成28年度には24分まで短縮できるようになり、一定の成果を挙げていると確信していた。しかし、ある投書にて「去年の地震訓練に参加して、他入居者が訓練に無関心で不安を感じる。改めて地震訓練を見直して欲しい。」との指摘を受けた。そのため、入居者の意識が向上し、共に助け合う仕組みができるよう、職員主体の地震訓練ではなく入居者参加型の地震訓練に取り組んだ。

【方法】

- ① 安否確認マグネットを導入する。
- ② 防災便りを作成し訓練参加を呼び掛ける。
- ③ 訓練の時間帯に、里バスの運休、診療所休診など里内での活動を休止する。
- ④ 安否確認訓練と避難誘導訓練の両方を実施する。
- ⑤ 伊東市消防署員による防災に対する講話を実施する。

【結果】

地震訓練の参加人数228名のうち新たに導入した「安否確認マグネット」を150名の方が使用し、よりスムーズに安否確認を行うことができた。訓練終了後の伊東市消防署員による地震訓練の総評、防災の講話に107名の方が参加した。

【考察】

大きな災害に遭ったとき、入居者自身の助け合いは施設の大きな力になる。また、入居者の多くは災害時、自分だけでなく他の人のために力を尽くしたいという気持ちを持っている。

【結論】

災害に強い施設になるためには、職員と入居者が同じ意識のもとで、共に助け合う仕組み作りが大事である。今後も継続して地域や消防などの関係機関との連携を深め、職員と入居者の気持ちが一つになるよう、共に助け合う仕組み作りを推進していく。

【優秀賞】

キュッとまとめる業務推進

～笑顔あふれるコミュニティを目指して～

京都〈ゆうゆうの里〉生活サービス課コミュニティ

○二橋由希子 勢川晴子 松岡典子 土井明彦

【目的】

京都〈ゆうゆうの里〉は創立20周年を迎え、組織の改編があり、新たに仕事が増えたことによって多くの職員が忙しさを感じるようになった。仕事内容の伝達不足による業務ミスも発生した。又、「職員は忙しそうにしているので話辛くなった」という入居者からの言葉を聞いた。あるべき姿として、働きやすい職場環境を作り、より良いコミュニティを築くため、コミュニティサービス職員全員で業務の効率化について検討を行った。

【方法】

仕事を「シンプルにまとめる」をコンセプトとして以下の取組みを行う。

- ①5S（整理、整頓、清潔、清掃、接遇）を基本にして働きやすい環境作りを行う。いらないものを捨て、必要なものだけを残して効率的に仕事ができるようにする。
- ②特に時間のかかる売店業務（発注、値付け、棚卸し）の時間短縮を行う。
- ③いろいろな方法、場所で入居者とコミュニケーションをとる。食堂やポスター掲示などへ移動する途中でも、ちょっとした時間を見つけて、声掛けや傾聴をする。

【結果】

備品の置き場所を用途別にまとめて明確にし、職員の誰もが把握できる状態になった。業務の見直しを行い不要な業務をなくし、時間がキュッと短縮できたことにより利益に転換することができた。業務の効率化を行なうと同時に、入居者とのコミュニケーションも大事にしてきた結果、再びカウンターに立ち寄ってくださるようになった。

【考察】

働きやすい職場環境への改善は仕事の効率を上げることに繋がったと考えられる。

【結論】

職員一人一人がどうすれば仕事の効率を上げることができるかを考えるようになり、誰かがやってくれるだろうという考えがなくなり、自分で工夫していく姿が現れた。職員同士で、積極的に意見を交わしながら改善していったので、良いコミュニケーションが取れるようになった。業務効率化を目指して働きやすい環境を作ろうと取り組んだことが、結果的に職員、入居者のことを考えた職場作りに繋がった。今後の課題は引き続きこの状態が保てるよう取組みを継続していく事が大切だと考えている。

【優秀賞】

ユマニチュードⅡ

～パーソナルケアを求めて～

京都〈ゆうゆうの里〉診療所

○山本保代 篠原祐加

【目的】

昨年、私達は処置時に抵抗のある方への「ユマニチュード」を取り入れた対応について研究し、効果を認める事ができた。そこで今回は、褥瘡処置に対して抵抗のあるA氏に少しでも穏やかに処置を受けていただこうと思い「ユマニチュード」を用いて処置した。しかし、抵抗が少なくなることはなかった。A氏に穏やかに処置を受けて頂くにはどうすれば良いのか。その為に必要な要素は何なのかを検証し、報告する。

【方法】

・データ収集方法（平成29年6月～平成29年8月）

1. 褥瘡処置を毎日1回施行しているA氏を対象に「ユマニチュード」を取り入れた対応を導入。
2. 看護職員の対応・A氏の反応を点数化して評価。

【結果】

6月…昨年実施した「ユマニチュード」の基本対応に則って処置施行。

看護職員の対応…平均14.1点（15点満点）、A氏の反応…平均点3.7点（9点満点）。

7～8月…A氏の個別性を考慮し「ユマニチュード」を取り入れ処置施行。

看護職員の対応…平均13.7点（15点満点）、A氏の反応…平均6.6点（9点満点）。

【考察】

同じユマニチュードでも個別性を取り入れた対応と、ユマニチュードのみの対応では看護職員の対応の点数は殆ど変らなくても、A氏の反応に平均で2.9点の差があった。A氏が穏やかに処置を受けて頂ける要素は、処置中常に手を握り、話しかける、というものであった。対象者がより安心感を持って処置を受け入れてもらえるにはユマニチュードに加え、その方の個別性を捉えて援助していくことが大切であると分かった。

【結論】

「ユマニチュード」を取り入れる際、基本の対応だけでなく個別性を考慮する事でより穏やかに処置を受け入れて頂くことができた。今後の課題は、どのようにして個別性を捉えるか、また効果的に援助するためにその個別性をユマニチュードにどう反映させていくかである。

【優秀賞】

あなたの笑顔が見たくて

～終末期に私たちができること～

神戸〈ゆうゆうの里〉 生活サービス課○ 谷田愛美
食事サービス課 木村奈々 診療所 志村佐知 ケアサービス課 楢山真澄

【目的】

高齢者の多くは様々な病気を抱えながら生活をしている。中には病気と闘いながら住み慣れた〈ゆうゆうの里〉で最期を迎える方もいる。

最期までその人らしく、残された日々をいかに本人の希望に添ったものにできるか、どうすればその方に寄り添ったケアができるのか、日々悩みながら関わりを続けている。身体的にも精神的にも悲観的になりやすい状況の中で、少しでも楽しみや小さな目標を持つことで、生きがいを感じてもらうことはできないか。笑顔を見たい、喜びや楽しみを共有したい、という思いから、他課とも連携しながらケアを行ってきた。

【方法】

〈対象〉

Aさん（90歳代前半）膀胱がんの末期。

2016年1月に余命1ヶ月の宣告を受け、〈ゆうゆうの里〉診療所へ転院。

その後も体調や全身のレベルの変動があり、一時介護室の利用や診療所への入院を繰り返していた。

〈期間〉

2016年1月28日～2017年4月25日

〈取り組み内容〉

- ・職員が終末期の対応への理解を深め、対応時にはできる限り希望を引き出し、希望を聞いたときは早急に対応できるようにするため、すぐに担当職員へ知らせてもらうよう周知。
- ・本人の思いに添って、自課だけでなく必要に応じて専門職である他課とも連携を図り、本人の希望を実現可能なものにし、喜びや楽しみを共有する。

【結果】

- ・午前と午後のお見舞い業務以外にも、職員が積極的に会いに行くことが増え、小さなことでもすぐに担当職員へ報告がくるようになった。
- ・診療所入院中の誕生日には、診療所スタッフや食事サービス課スタッフとも連携して、本人の希望だったステーキと、自身でよく買い物に行っていたパン屋の「思い出のパン」を食べてもらうことができた。

【考察】

顔なじみの職員が会いに行くことで日々の生活に刺激が生まれ、同時に安心感につながっていたのではないかと考える。多くのスタッフが、様々な角度からコミュニケーションを深めたことで、本人の希望を引き出して実現へつなげることができたと考える。

【結論】

特に終末期においては、本人の希望をできる限り実現するため、他課との連携は必要不可欠である。多職種のスタッフが1つの同じ目標に向かって取り組みを行い、入居者の笑顔を見ることができたときに、喜びや楽しみを共有することにつながる。今後も本人の思いに寄り添い、多職種が連携し希望を実現できる取り組みを続けていきたい。